

序章 “科学／技術言説の文化史” を編むために

「科学」をめぐる修辞学

一九二一年一月、内務省神社局によって刊行された『国体論史』という書物がある。その中味は、おおよそ徳川時代から現代（大正中期時点）にかけて、日本で「国体」という概念がどう論じられてきたかを網羅的に紹介したもののだが、その末尾（「余論」）で、編者を務めた歴史学者の清原貞雄は、次のように述べている。

吾人今我国体を説かんと欲するもの、人の信ずると信ぜざるとを度外にして一個の祝詞嘉詞を述ぶるにはあらず、国民をして之を了解せしめ、之を信ぜしめんと欲するにある以上は、国民

が殆ど常識として有する所の科学的智識に抵触せざる理論の上に立たざる可からず、皇統連綿万世一系を説く如きは最も良し、然れども諾再二神が始めて虚空の内に世界を作成したるを如実に説きて、かるが故に人民は素より一木一草に至るまで其御子孫たる皇室の私有なりと説くは如何にや、之れ我国の神話なり、神話は其国民の理想、精神として最も尊重すべし、只それ尊重すべきのみ、之を根拠とし我国体の尊嚴を説かんと欲するは危し、先入主として、之等の「国造り説」と相容れざる進化学上の智識を注入せられ居る国民は或は之を信ずる事を得ざるが故なり、

清原は、伝統的な「国体論」が、今日の「科学的智識」に抵触するものであつてはならないこと、また神話的な「国造り説」と「進化学上の智識」が、必ずしも共存しないことを説く。清原自身、こうした「科学的智識」を重視する立場から、天皇の権能を組織体系としての国家の枠内に組み込もうとする発想——いわゆる天皇機関説を支持しており、ゆえに後年、この学説が言論空間で排斥されていくと、前述の「余論」を全て削除した改訂版を私的に製作していくのだが、少なくとも大正半ばの時点で、現行の「科学的智識」に即して「国体」を論じるべきであるという主張が、内務省神社局という中央官庁から公的に刊行された書物に記されていたという事実は注目し得る。

この「国体」と「科学的智識」の関連は、昭和改元以降、たとえば里見岸雄によつて深められていく。国柱会の創設者である田中智学の三男として、早くから論壇で頭角を顕わした里見は、みずから創刊した雑誌『日本文化』掲載の諸論や、『日本国体学概論』（里見日本文化研究所、一九二六・九）などの著作を通じて、「科学的国体論」という独自の知的体系を構想する。この「科学的国体論」の

提唱について、里見は後年に「東條内閣の成立に及び右翼の各派百数十名の連名脅迫」を受けたことを明かしているが（『科学的国体論』眞日本社、一九四七・七）、そうした弾圧にも屈さず、さらに里見は『天皇の科学的研究』（先進社、一九三二・七）を上梓し、天皇制や「国体観念」のあり方自体を「科学」的に討究することの必要性を講じていく。その冒頭に付された「例言」の一部を引用しておきたい。

天皇を科学的に研究するといふ事を、この上なき不敬だと考へたり、又は危険だと考へたり或は余計な事だと考へたりする者がすくなくない。この種の人々こそ、意志は兎に角、結果に於て国体観念の明徴になるのを妨害し厭避するに等しい。然し若し日本が今後益々国体事実を明かにし、以て明確なる国体観念を樹立する事を必要とするならば、この必要は科学的研究を生む。科学的研究は民族の生活的必要を限度とする。必要が無いのに又は必要の無い部分まで科学的に研究せねばならぬといふのでない。本書に示した天皇の科学的研究は実に現下日本の民族的生活的切実なる必要に基いて微力をも顧みず世に問ふものである。

ここで強調される「科学的研究」の必要性は、さらに「日本の政治的機構、社会的機構等が、益々科学的に究明せられつゝある日に、これらのものと、深き関係に立つ国体、天皇、皇室等の機構や機能が科学的に研究せられて居らない事は、日本の一の矛盾でさへあるのであつて、学的に皇運扶翼の十分なる状態現出し得てゐない事にほかならぬ」と嘆く『国体憲法学』（二松堂書店、一九三五・一

○へと受け継がれる。林尚之が指摘するように「里見の国体論では、国体は共存共栄社会の建設にむかっていく過程として動態的に把握され、天皇主権を制限するものとして位置づけられていた」と要約できるが、「科学的研究」という標語は、そのような試みを根拠づける重要な支柱として導入されていたことが窺われる。

もとより、帝国日本の存立機制と「科学」の交錯は、とりわけ天皇主権の制限・批判に留まるものではない。本書でも述べていくように、戦時下の統治権力は「科学」を否定した反一理性的な主張を展開するどころか、往々にして時局の政策判断が「科学」的であるべきだということを盛んに強調していた。たとえば、一九四〇年に文部大臣へと就任した橋田邦彦は、理科教育の振興という見地から『科学する心』（教学局、一九四〇・一〇）と銘打たれた書物を刊行し、明確に「皇基の振起といふことに科学が御役に立つことは申すまでもない」と念を押す。言うまでもないことだが、一九三〇年代の後半以降（特に第二次近衛内閣の発足以降）、帝国日本における「大東亜共栄圏」構想の一端は、知的劣位にあることにされた諸国に対する「文明の救済」という名目で行なわれたのであり（松岡洋右『興亜の大業』第一公論社、一九四一・五）、その点で一連のアジア太平洋戦争もまた、しばしば「科学」的な洞察に基づいた「実に必然にして、合理的」な営みと捉えられていたのである（小山謙吉「科学と国家」「学生の科学」一九四二・三、傍点引用者）。

直截的な行政の担い手たち以外にも、帝国日本の伝統的な思想理念と「科学」を、独自の仕方で縫い合わせた論述の仕方は散見される。一九三二年、左傾学生への対策として設立された国民精神文化研究所に所属した経済学者の作田壮一は、著作『国民科学の成立』（国民精神文化研究所、一九三四・

三)において、帝国日本における国民生活の指導方針として「国民科学」なるものの設立を提唱する。また、東洋漢方医学の権威として知られる中山忠直も、戦時下に「日本主義」を「科学」的に根拠づけようと、さまざまに試行錯誤を重ねていく。一九四〇年一月に刊行された『日本に適する政治』（私家版）では、「今後の日本主義は本能的日本主義から、理智的日本主義へ進歩せねばならぬ」と説かれる。こうした着想が、本書の第九章でも検討していくように、同時代の「日本科学」という表象概念と分かちがたく結びついたものであったことは論を俟たない。

ほか、明確に国粹主義的な立論の構えを取っていなかったとしても、たとえば「今日の政治国防経済は常に科学研究の結果を利用するのみならず、その運用自体が科学的なることを特色とする」云々（田邊元「科学性の成立」『文藝春秋』一九三七・九）、「戦争も科学戦であれば、戦時体制もまた科学的体制でなければならぬ」云々（末川博「科学への用意」『中央公論』一九四〇・七）など、戦時下の政治・経済体制が「科学」的であるべきという主張の類は、個別の事例を示していけば枚挙に遑がない。要するに、時代情勢を「科学」的に捉えることの大切さは、それ自体が口当たりの良い文言として、その社会的立場の如何にかかわらず、実に多様な論客たちが挙げて言い募っていたのである。

もちろん、翻って戦間期の左派論壇では、いわゆるマルクス主義に端を発する「科学」（社会科学／科学的社会主義）が、圧倒的な覇権を握っていた。一九三〇年代、雑誌『唯物論研究』を中心に、反体制的な言論活動を続けた科学史家の岡邦雄は、現行の社会状況について「真の科学性が隅つこの方に小さく踏みつぶされ、最も非科学的なものが「科学的」として跳梁」していると評す（『科学主義』と科学精神）『唯物論研究』一九三七・一〇）。また、本書の第五章でも詳述するように、同じく

『唯物論研究』の創刊に携わった一人であり、マルクス主義系の批評家として広く活動した戸坂潤は、一貫して「科学」的な思考の訓育を通じて、同時代の統治権力に対抗することの必要性を唱えていた。こうして見ると、さしあたり真っ向から相対立していたはずの左右陣営において、ともに「科学」に即した思考のあり方を獲得し、物事を「科学」的に把握することが強く求められていたことを確認できる。

もとより、今日でも総体的に見て「科学」への信頼は一向に疑われていない。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の騒乱を挙げるまでもなく、しばしばジャーナリズム上の争点は「科学」対「非科学」ではなく、ある「科学」と別の「科学」の衝突として顕われ、どちらの側が真に「科学」の枢要を理解しているかという解釈学的な抗争を引き起こす。しかし、なぜ多くの論客たちは、左右問わず自身の主張が「科学」的なものであることを声高に強調するのだろうか。

さしあたり、それが理知的なものの見方を標榜するものであり、だからこそ普遍的に共有可能な説得性を託されているというのが、その暫定的な解答となるだろう。では、理知的なものの見方に、これほどまで人びとが魅了されることの意味を、どのように問うべきだろうか。この点について、H・アーレント『全体主義の起原』（第三巻、大久保和郎ほか訳、みすず書房、二〇一七・八）の見解を引用しておきたい。

人間の精神の能力で、確実に機能するために自己も他者も世界も必要とせず、経験にも思考にも依存していない唯一のものは、自明性をもってその前提とする論理的推論の能力である。否

応のない自明性の基本的原則、2 + 2 = 4 という自明の理は、絶対的な独りぼっちであることのもとにおいてすらも枉げられることはあり得ない。これは、人間が経験するため、生活するため、そして共通の世界の中で彼らの進むべき道を知るために必要とする相互的な保障を失ったとき、すなわちコモン・センスを失ったときにもなお頼ることのできる、唯一の信頼できる〈真理〉である。だがこの〈真理〉は空虚である。いや、むしろこれは全然真理などというものではないのだ。なぜならそれは何もものを啓示しないのだから。

アーレントによれば、各々の「論理的推論」は「経験にも思考にも依存していない唯一のもの」（＝〈真理〉）であり、ゆえに「大衆」^{モツブ}に対して生きるべき指針を導くものであるという。ここだけ取り出してみると、社会活動における「論理的推論」の重要性を称揚しているようにも見えるが、アーレントは続けて、こうした「論理的推論」（＝〈真理〉）は「空虚」であり、「何ものをも啓示しない」と批判する。なぜなら、政治的な全体主義は一種の「イデオロギー」を差し出すものだが、前述の「論理的思考」は諸々の「イデオロギー」に表層的な必然性を与えるものであり、ゆえに「大衆」は——それこそが「科学」的であるという理屈によつて——「正しさ」を大義名分として、諸々の社会共同体に自発的従属を志していくからである。

「科学」は諸々の「イデオロギー」と対立する（あるいはメタ次元に立つ）ものではなく、むしろ諸々の「イデオロギー」が人びとに共有されるための重要な因子となる。そのような「科学」の相貌は、特に戦間期の帝国日本において顕著に認められよう。先に挙げた論客たちが意識していたのは、

言わば「科学」を万能的知的意匠として用いようとする弁論の進め方であり、その点において自身の理論的立場を粹づける「科学」の無謬性を信奉する限り、予め「正しい」ことが自明の前提となっていた。ならば、ここで検討すべきなのは、各々の主張の「正しさ」を判定すること自体ではなく、そこに如何なる修辭レトリックが繰り込まれているのかを解き明かすことであろう。

戦間期日本の文学者たちも、しばしば「科学」という知的意匠の覇権について旺盛に論じている。その典型と云うべきものを瞥見しておこう。

今は一切が科学である。猫も杓子も科学の認定を経なければ存在理由を所有しない。そして人は、科学の生んだ一切の思想、生活、器械、商業の支配下に押しこめられてしまった。

(加藤一夫「芸術を科学より解放せよ」『読売新聞』一九二五・九・二八朝刊)

ここには、近代社会が産み出した「科学」のあり方が、それ自体として社会活動の「一切」を取り込もうとしていることの逆説が綴られている。無論、そのような捉え方自体が、前述した「イデオロギー」の賜物であるとも言えるが、しかし「我々は今や我々の王座に「科学」の君臨を仰いでいる」(雅川澁「科学的より超科学的への軌道——貧しき覚書として」『新文学研究』一九三一・一)と、ひとまず同時代の文学者に語らせてしまうほどの「科学」の権能が、そもそも何処に由来するものであったのかは確認しておかねばならないだろう。

辻哲夫は、昭和初期において「科学」が「あらゆる機能を推進する最も強力な手段として、大きく

社会的関心の的になった」ことから「限られた個々の専門的職業にとどまらず、いまや多様な国家的任務をになう社会的存在としての本性をあらわにした」と指摘している³⁾。また、佐藤文隆は「高学歴者の配属先としてあった「職業としての科学」が、一九二〇年代を境に「大衆文化の中で消費されるものにも拡大した」と述べている³⁾。出版市場でも、たとえば『大衆科学叢書』や『誰にもわかる科学全集』などを始めとして、『科学知識』『科学画報』から『科学ペン』『科学朝日』『科学主義工業』に至るまで、戦間期の帝国日本では実に多くの科学雑誌・科学全集が創刊・刊行され、一種のフロンティアが開拓されることになった。

特に、理論物理学者の石原純や寺田寅彦らによつて、岩波書店から一九三一年に創刊された『科学』は、人文・社会系知識人と自然科学の遭遇という観点から見て象徴的な意味を持つ。『創刊の辞』（一九三一・四）において、石原は「一方に於ては一つの専門的研究に従事する学者の爲めに他の分科に於ける重要な最近の進歩を知らしめて学者としての常識を補ひ、他方に於ては現に活躍しつつある学界と、之を取り遶る一般社会並びに特に将来の学徒たらんとするものとの間によりき連絡を保たしめんがためには、是非とも之に適應した一般科学雑誌が必要である」と述べる。従来、限られた学術共同体のなかで占有されていた専門知のあり方は、より公共性を帯びた有益な企てとして再編され、併せてアカデミズムとジャーナリズムの境域もまた着実に融解していくことになる。

他方、そうした専門知と関連するかたちで、より具体的な科学技術の成果もまた、人びとに多くの恩恵を与えることになった⁶⁾。この点について、本書の第Ⅱ部で主題的に取り上げる横光利一は、関東大震災の衝撃を回想する文章のなかで次のように述べている。

眼にする大都会が茫茫とした信ずべからざる焼野原となつて周圍に拡つてゐる中を、自動車といふ速力の変化物が初めて世の中にうろうろとし始め、直ちにラヂオといふ声音の奇形物が顕れ、飛行機といふ鳥類の模型が実用物として空中を飛び始めた。これらはすべて震災直後わが国に初めて生じた近代科学の具象物である。焼野原にかかる近代科学の先端が陸続と形となつて顕れた青年期の人間の感覚は、何らかの意味で変らざるを得ない。

〔解説に代へて（一）〕『三代名作全集——横光利一集』河出書房、一九四一・一〇）

横光は、関東大震災の後に生まれた「近代科学の具象物」——自動車・ラジオ・飛行機など——が、人びとの「感覚」に大胆な質的変容を促したことを指摘している。日常生活が「近代科学の具象物」に覆われ始めたことが、横光を中心とする新感覚派、ひいてはモダニズムと呼ばれる文芸思潮の興隆を導いた一因であることは言うまでもない。同時代には、美術評論家の板垣鷹穂などによつて「機械芸術論」という新たな表現営為が探られ、また本書の第八章でも触れるように、特に左派論壇では技術論や技術者論が流行していくことにもなるのだが、それらも横光の言う時代の転変に応答した文化運動の一種として捉えるべきものであらう。

つまり、戦間期の帝国日本は、人文・社会系知識人が「科学」という知的体系や、その技術的な恩恵と、従来とは異なる次元で本格的に出逢い始めた時期にあたり、そのなかで先述したような「知」をめぐる権威のあり方も、言わば新しい思想的課題として浮上したわけである。マルクス主義から

「国体論」に至るまで、戦間期の人びとを突き動かしていた思想理念は、必ずと言っていいほど「科学」とどう向き合うべきかという問いを突きつけられていた。そこに、アーレントの言う「論理的推論」と「イデオロギー」が入り混じる重層的な問題系が顕われてくることになる。

本書の目的と理論的背景

本書では、以上のような前提を踏まえ、戦間期日本の言論空間と「科学」——以降の本書では、学知の中味自体ではなく論客たちによる扱われ方を指すという意味で、便宜的に「科学／技術言説」と呼び表わしたい——の関係を、特に文学運動の周辺領域を中心としつつ考察していくことを試みる。この考察は、前著『合理的なものの詩学——近現代日本文学と理論物理学の邂逅』（ひつじ書房、二〇一九・一一）における研究成果を拡げたものであり、前著が概ね理論物理学という限定的な学知の受容と展開に照準を絞っていたのに対して、本書では特定の専門領域に拘らず、より多面的に戦間期日本における「科学／技術言説の文化史」を編みなおすことを目指す。とはいえ、その方法意識は前著と相補的なものであり、必要に応じて本書でも適宜参照していくことになるだろう。

もちろん、こうした立場からの分析と考察は、相応に先行研究の蓄積がある。特に、近年の重要な文献として岡本拓司『近代日本の科学論——明治維新から敗戦まで』（名古屋大学出版会、二〇二一・一二）を挙げておきたい。岡本は、近代日本における複数の「科学論」の抬頭を通時的・共時的に検討し、各々の理論的背景や社会状況を踏まえつつ、その消長のあり方を包括的にまとめ上げる。実